

## IV 各教科研究開発の実際

### 国語科

#### 1 教科でめざすテスト開発

学力診断テストの開発にあたって、国語科では、次のような基本方針を立て、テストの開発を進めた。

(1) 小学校では、特に「言語についての知識・理解・技能」に重点をおき、設問数を多くする。

中学校では、特に「理解の能力」に重点をおいて、設問数を多くする。

小学校では、「言語事項」として、「文字」「表記」「語句」「文語調の文章」「文及び文章」「言葉遣い」などの項目について、数多くの内容を学習する。これらの内容は、正確な理解や適切な表現をするための基礎であるとともに、中学校・高等学校で学習を進めていく上でも、基礎となるものである。こうした力は、小学校の段階で、確実に身につけておく必要がある。そこで、特に、「言語についての知識・理解・技能」について重点をおくようにした。

中学校の「理解」の学習では、小説、随筆、ルポルタージュ、論説など、多種多様な文章に接し、これらの文章をより正確に理解していく力が必要となる。また、古典も学習するようになり、古典を理解する基礎を養い、古典に親しむ態度を育成していくことが必要となる。そこで、特に、「理解の能力」について重点をおいた。

(2) 「聞き取り」の問題を必ず設定する。

学習指導要領の改善の一つに、音声言語の指導の重視があげられている。音声言語の指導内容には、「聞くこと」、「話すこと」、「話し合い」などがある。本テストは、ペーパーテストとして行うため、その中でも、「聞くこと」を取り上げ、「聞き取り」の問題を必ず設定するようにした。

(3) 「表現の能力」の問題は、作文を書く際の技能を焦点化して問題を作成する。

本テストの診断の仕方から、「表現の能力」をその

まま測ることは困難であるため、作成途中のある作文や構想メモを提示し、作文を書いていく際の、特に大切と思われる技能を焦点化し、問題を作成するようにした。

#### 2 要素表に基づく設問項目の設定

設問項目を設定する際に、まず、要素表を作成した。

国語科では、要素表の「学力診断の観点」として「国語に対する関心・意欲・態度」、「理解の能力」、「表現の能力」、「言語についての知識・理解・技能」の4つを設定した。

作成した要素表の一例として、中学校3年の「理解の能力」の部分を以下に示す。

観点	理 解 の 能 力
到達目標	話や文章の構成や展開に即して主題や要旨をとらえ、話し手や書き手の立場や考えの進め方、表現の仕方や特徴などに注意して、自分の見方や考え方を深めながら内容を的確に理解する。
診断要素	診 断 内 容
内容把握と要約	○ 話や文章の展開に即して、的確に内容をとらえ、目的や必要に応じて要約することができる。
ものの見方や考え方	○ 話や文章に生かされているものの見方や考え方を理解し、自分の見方や考え方を深めることができる。
構成や展開	○ 話し手や書き手の考えの進め方をとらえ、内容の理解や自分の表現に役立てることができる。
語句の意味や用法	○ 文脈の中における語句の効果的な使い方について理解し、自分の表現に役立てることができる。